

国際交流基金助成事業報告書

大阪薬科大学 薬学部 1年次生 濱本 貴子

この度、国際交流基金助成基金の助成を受けて、平成27年3月1日から3月28日までシンガポールを訪問したので、報告致します。滞在中は朝から夕方にかけて現地の語学学校へ通い、夕方からは様々なアクティビティに参加することで、語学だけでなく異文化についてや、価値観の相対性を身にしみて学ぶことが出来ました。

1. 語学学校

シンガポールにある EF Singapore Language School という語学学校で土日を除く平日の朝9時から17時まで英語を学びました。

事前に受けたオンラインテストと初日に受けるマンツーマンのスピーキングテストでクラスが決まりました。毎週末に実施されるテストで次の一週間のクラスが変わるため、ずっと固定のクラスメートはいませんでした。日本・中国・台湾・韓国・インドネシア・カザフスタンなどアジアから来た人だけでなく、スペイン・フランス・イタリアといったヨーロッパから来た人たちと同じクラスになることがありました。

授業内容は、午前中の一コマで文法を学び、それ以降はスピーキングメインで行われるディスカッションやディベートといった、実際に話すことを重視したプログラムでした。ディスカッションは各クラスメートが普段仕事や大学で学んでいる内容になるべく近い世界共通の社会問題についてであったため、ただ“日常会話での英語力”ではなく“実践的な英語力”を育成していくことが出来ました。同じ日本人同士でも学校内で日本語を話すことは決してなく、常に英語で話す、時間がかかっても英語で話すことを約一ヶ月実践し続けることで、短い期間でしたが確実に得るものがあったと実感致しました。



2. アクティビティ

学校では留学生のために土日を含め毎日アクティビティプログラムが用意されていました。シンガポールは治安がとても良い国であることもあり、アクティビティは授業後から夜日付が変わるまで行われることがありました。

入学初日の Welcome Dinner/ Welcome Party から始まり、Night Safari, River Safari, Marina

bays sands, Merlion 等、多々あるシンガポールの観光名所へ訪れました。

シンガポールは公共語が英語・中国語・マレー語・ヒンドゥー語と4つもあるように、多国籍文化を持ち合わせる国であり、中華圏の雰囲気味わえる場所から、少し歩けばインド圏の雰囲気味わうことが出来る場所まであったので、同じ1つの国に滞在している気がしませんでした。China town という中華圏出身の方がたくさん住んでいる地域を訪れた時に中医学（日本でいう漢方学）の概念に基づいて経営している薬局を訪れました。中華圏の生薬を扱っている薬局の多くで、個人の写真撮影禁止という規定があることから伺われるように、取り扱われている生薬は貴重で高価なものばかりでした。

最初の何日間のアクティビティを通して、私はこの約一ヶ月間の留学において特にアクティビティに重きを置くことにしました。というのは、学校では“英語を話す機会が提供されている”けれども、アクティビティにおいては“英語を話す機会を自らで探さなければいけない”からです。ただそこに立って同じ空間・時間を共有しているだけでは、何も得ることがないのです。“話せなかったらどうしよう”といった不安や恥を捨てて積極的に話しかけることで、一見放課後の娯楽のように思いがちな時間でさえ、学習を意識し有効に使えたと思います。



@River Safari



@Clarke Quay



@Little India



@China town

3. その他

シンガポールの立地上、隣接する国に容易に行くことが出来たため、英語の聞き取り・会話にだいぶ慣れてきた3週目の土日を使ってマレーシアへ行きました。

マレーシアのマラッカまでバスで4時間、まずはマラッカを訪れ有名な寺院や建物を訪れました。日本は無宗教であることが普通であったり、逆に宗教という言葉にとっても敏感に反応したりする人がとても多いですが、外国では信仰することがとても大切な生活の一部であることを感じました。

マラッカから2時間かけて、都心部のクアラルンプールへ移動しそこで一泊しました。現地の人とたくさん話し、マレーシアが抱える医療問題の1つとして“生活習慣からくる肥満率の高さ”が大きくあげられていることや、病院は充実しているけれども、深刻な医師不足という問題もあり、国は数年前に医療分野における外資規制を行ったということも知りました。また、シンガポールが世界一物価の高い国と言われているのに対し、隣国のこの国は物価がとても安く、日本の3分の1程度であり、途上国であることを痛感しました。



(マレーシアの2人の中国人とインドネシア人と)



(マレー料理)

4. 感想

たった一ヶ月という短い期間でしたが、まずは学校・私生活共に英語を最大限に学習することが出来たことに満足しています。そして、現地に住んでいる人や他の国から来た留学生との交流を通じて、最初に記載したように、十人十色の価値観が世界にはありふれていることを実感しました。また、視野を広げて考えることで、何事においても可能性が広がることを知りました。シンガポールへ行って初めて気づき、反省と同時に恥じらいを感じたことのひとつに、“自身の無知さ”があります。20年近く日本に住んでいるにも関わらず、例えばシンガポールと日本の交戦歴を知りませんでした。大学で学ぶことはもちろん、日本の歴史・政治・経済等の問題は、立派な成人となり未来の担い手となっていく上で知っておくべき常識であることを痛感し、今後の課題にしていくことを強く思いました。

このような素晴らしい機会を得ることができたのも国際交流助成金のおかげです。ありがとうございました。